



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

| | |
|------------|---|
| Title | 日本語通訳ビジネス科における日本語劇への取り組み：実践報告 |
| Author(s) | 徳久 圭, 郭 旻恵, 唐澤 麻里, 桑原 里奈, アルバーディング 聖子 |
| Citation | 文化外国語専門学校紀要 37 (2025-02) pp. 1-23 |
| Issue Date | 2025-02 |
| URL | http://hdl.handle.net/10457/0002000135 |
| Rights | |

実践報告：日本語通訳ビジネス科における 日本語劇への取り組み

日本語通訳ビジネス科専任講師 徳久 圭
日本語通訳ビジネス科専任講師 郭 旻恵
日本語通訳ビジネス科専任講師 唐澤 麻里
日本語通訳ビジネス科専任講師 桑原 里奈
日本語通訳ビジネス科専任講師 アルバーディング聖子

・要旨

文化外国語専門学校日本語通訳ビジネス科では、2015 年度より留学生への日本語教育・通訳翻訳教育の一環として日本語による演劇作品の上演を行ってきた。その取り組みの前提となる考え方、授業における指導方法、上演の実際、上演後の反省と今後への展望を紹介し、実践報告としたい。

・キーワード

通訳教育、演劇教育、日本語教育、日本語劇、語劇

1. 言葉の定義

最初に、この実践報告で用いている言葉の定義について若干の説明を行いたい。

日本語劇：日本語の台詞を主として用いた戯曲をもとにした演劇作品とその上演を指している。

母語／母国語：母語とは、ある個人が幼少時から慣れ親しんで最初に獲得した言語であり、最も自由に自らの感情を表現することができる言語のことである。これに対して母国語とはある個人が生まれた国や所属している国において公用語あるいは国語として使用されている言語であり、ある個人にとっては必ずしも「母語＝母国語」であるとは限らない。日本語通訳ビジネス科の留学生も、その言語環境は政治的・歴史的な背景から多様であり「母語＝母国語」ではないこともあるため、この実践報告では基本的に「母語」という表記を用いる。

外語／外国語：同様に外語とは、ある個人が母語以外に習い覚えた言語のことを指すが、言語は国家単位で「〇〇国の言葉」と特定することが必ずしもできないため、この実践報告では基本的に「外語」という表記を用いる。

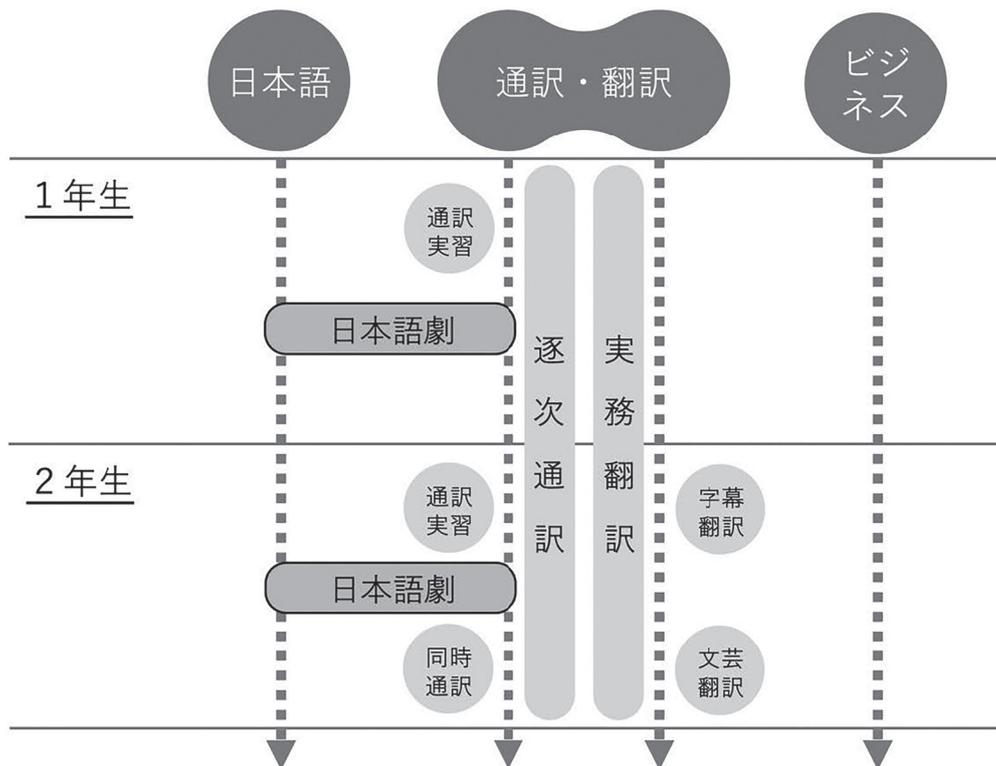
〇〇人／〇〇語母語話者：通常〇〇には出身国・地域の名称が入るが、上述のように特定の国の言語がその国の名前と同じ名称の「〇〇語」であるとは限らないため、ある個人において母語がどの言語であるのかに着目して、この実践報告では「〇〇人」ではなく「〇〇語母語話者」という表記を用いる。

2. 日本語通訳ビジネス科について

文化外国語専門学校日本語通訳ビジネス科は二年制の専門課程（専修学校専門課程）である。学生は非日本語母語話者の留学生で、所定の課程を終えると「専門士」の称号が付与される。1、2年生を合わせた50名程度の出身は、2024年度を例に取れば、東アジア、欧米、中南米、東ヨーロッパと様々である。

本学科のカリキュラムは、日本語科目、通訳・翻訳科目、ビジネス科目という3つの柱から構成されている（図1）。

図1



日本語科目では上級日本語を学ぶ。学生は、日本語能力試験（JLPT）N2レベル相当の力で入学する。入学後は、その日本語能力をさらに伸ばし、卒業後の就職や進学において求められるレベルにまで高めることを教学上の目標にしている。

通訳・翻訳科目では、日英／日中クラスに分かれてそれぞれの言語間における通訳や翻訳の技術を学ぶことを目標にしている。基本的には卒業後の業務における必須のスキルで

ある逐次通訳と実務翻訳を学内で学んでいるが、通訳訓練においては校外での逐次通訳実習に加えて2年次の最後には同時通訳実習も行い、翻訳訓練においては字幕翻訳や文芸翻訳についても学ぶ。さらに日英／日中クラス合同で通訳や翻訳に関する概論の学習や通訳・翻訳の訓練を行うこともある。

ビジネス科目では、就職活動における様々なスキル（履歴書やエントリーシート、就職試験、面接などへの対応）と仕事をする上で即戦力となるビジネス日本語、ビジネス慣習・マナーなどへの習熟を目標にしている。

卒業後の進路は大学や大学院に進学あるいは編入する者もいるが、大半は日本や母国あるいはその他の国での就職を志している。

上述したカリキュラムにおける3つの柱のうち、日本語劇への取り組みは主に上級日本語と通訳のスキルを高めることに重点を置いて行われている。この日本語劇は文化学園の4校（文化服装学院・文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化外国語専門学校）が合同で行う「文化祭」における上演を前提にしている。文化祭は毎年11月3日の「文化の日」を中心とした3日間で開催されており、日本語劇はそのうちの2日間を使って上演され、校内外の観客に披露される。

3. 通訳の演劇性

本学科で演劇を行う理由は、演劇性が通訳という作業に深く関わっているからである。通訳者に求められているものは、異なる言語間における意思疎通を成立させるために、その異なる言語を発する者（「原発言者」と呼ぶ）双方の間に入ってコミュニケーションの仲介・仲立ちを行うことである。その際に通訳者は原発言者に成り代わって話し、原発言者を「演じる」ことが求められる。ここでの「演技」は、俳優や声優によって行われる芸術表現としての演技とは性質が異なっているが、通訳という作業が他者の主張を自らの言葉で話すものであるという点を考えれば、一種の演劇性あるいは「芝居っ気」とでも呼ぶべきものが必要になる。これは一般的な通訳作業においては通訳者による発話が常に一人称で行われ、三人称で行われることは基本的にないという点からも確認することができる。例えば原発言者が「私は〇〇と申します」と自己紹介した際の通訳は、その原発言者に成り代わった通訳者による「私は〇〇と申します」という発話になるのが通常であって、「この人は〇〇です」のようにはならない。通訳者の演技性についてローデリック・ジョーンズ（2006）も、「ある意味で、会議通訳者は自分が通訳しているその人になりきるのだ。（中略）会議通訳者はその人に共感し、その人の身になりきり、その人の主義を支持しなければならない。男性の通訳者は『妊娠を四回経験した女性として話しますが…… Speaking as a woman who has gone through four pregnancies …』とごく自然に、そして説得力のある調子で言うことができなければならない」と述べている。

通訳者は畢竟、異なる母語話者同士であるクライアント（顧客＝原発言者）の声を双方向で届けるサービス業であり、発話における一種の演劇性や芝居っ気も、ホスピタリテイ

の発露と考えることができる。なぜなら、人間同士のコミュニケーションを、それも異なる言語間の原発言者同士の意図に寄り添う形で成立させるためには、その仲立ちを行う通訳者にも活き活きとした、原発言者の発話の雰囲気や表現を体現したパフォーマンスが求められるからである。

通訳者が行っている作業とは、言葉を変換することのみならず、発言者の発話の意図やその背景にある状況を理解した上で、自らの言語表現に加えて身体表現も交えながらコミュニケーションの仲立ちを行うという作業なのである。ダニツァ・セレスコヴィッチ (2009) は、会議通訳とは「語句の翻訳を口頭とするのではなく、意味を汲み取って聞き手に明示するのであり、評釈・明示化であるのだ。言葉の通訳者はその意味では、詩人や作曲家が書いたものを演じながらも、作者のメッセージを細部まで正確に伝え、その道の大家であるほど雄弁に伝える俳優や演奏家と同じなのである」と説明している。

原発言者同士が明るく楽しい会話を交わしたいという意向を持っているにも関わらず、通訳者が事務的で冷淡な話し方をした場合、そうした原発言者の意向が叶えられないことは容易に想像し得る。また異言語間の原発言者同士は、同言語間のコミュニケーション時であれば、容易にかつ無意識的に察知できるような言葉の裏にある含意（いわゆる「行間」といったようなもの）や文化的背景を汲み取ることが極めて困難である。そのため通訳者には、声の強弱や、顔の表情、身振り手振りを始めとするボディランゲージなども駆使して、そうした含意や文化的背景をも踏まえた原発言者の意向を十全に伝えることが期待される。

また、通訳者はパブリックスピーキング、つまり「人前で話す」ことを求められる職業である。現場で、端的に・理解しやすく・聞き取りやすく・誤解を招かず・長時間聞いていても疲れにくいといった要素が求められる話し方をする必要があり、アナウンサーや声優に近い職業だと言ってもよい。したがって、通訳者は単に語学のみならず、こうした発話の技術（アナウンス訓練・ボイストレーニング・朗読・演劇など）も学ぶことが理想とされている。日本語劇の取り組みも、この点に着目して発想されたものである。

4. 異文化コミュニケーション教育と演劇

本学科で演劇を通して目指していることの一つとして異文化理解能力の向上が挙げられる。劇作家の平田オリザは、欧米においては異文化コミュニケーション教育の中核の一つに演劇が位置してきたという伝統があると述べている。それは演劇が「常に他者を演じること」であり、「異文化、他者への接触をフィクションの力を借りてシミュレート（疑似体験）することができる」からであるとする（平田 2012:27）。

OECD（経済協力開発機構）加盟国の多くで行われている、義務教育終了段階にある15歳の生徒を対象にしたPISA（生徒の学習到達度調査）においても、生徒に求められている能力の一つは「文化を越えた調整能力」であり、「これを一般に『グローバル・コミュニケーション・スキル（異文化理解能力）』と呼び、その中でも重視されるのが、集団における『合意形成能力』あるいはそれ以前の『人間関係形成能力』である」と平田は解説している（平田 2012:215）。

こうした演劇への認識ないし演劇に期待されている教育的な効果は、本学科がそのカリキュラムで目指しているところと重なる。様々な異文化・異言語を背景とする留学生が日本語と通訳・翻訳技術、さらにはビジネススキルを学ぶ中で、互いの異文化理解能力を育み、文化を越えた調整能力を身につけることを目標にしているからである。

5. 語学教育・通訳教育と演劇

語学教育に演劇を取り入れる試みについても、これまで多くの実践例が報告されている。ここでは、日本語の運用という側面、および「3. 通訳の演劇性」で述べたような通訳が基本的に他人を演じる作業であるという側面から、語学教育（日本語教育・通訳教育）における演劇活用の効果や効用について考えてみたい。

5-1. 第二言語教育における演劇

国際表現言語学会の事務局長で日本語学の専門家でもある野呂博子は、第二言語教育に演劇を活用する意義について、それが「意味のあるコンテクスト中で行う身体的でホリスティックな^{注(1)}学習活動」であるからとし、その有効性として以下の4点を挙げている。

1. 目標 (target) 言語を用いて、意味のある、流れのあるインターアクションが生まれやすいこと、2. 個々の発音、イントネーションの特徴が、断片的でなく、インターアクティブで文脈がはっきりしている場面で学べること、3. 新出語彙、表現が、断片的でなく、意味のある文脈の中で学べること、4. 目標 (target) 言語を習得する上で自信が生まれること (野呂 2015:36)

また、演劇やドラマ自身が有している特徴として、①総合的な (ホリスティック) 活動であること、②身体を使う活動であること、③現在進行形の活動であること、④具体的な場を共有する必要があること、⑤何回でも試すことができる活動であること、⑥演技の基本は模倣であること、の6点を挙げている (野呂 2012:27)。

これらはいずれも語学教育 (通訳教育) との類似性や共通性を持っている。すなわち、上述したように通訳という作業は単に言葉の変換を行っているだけではなく、その場の空気や人間関係を考量しながら原発話者に成り代わってコミュニケーションを担うというホリスティックな作業でもあり (①)、声のみならず表情や身振り手振りなども駆使したコミュニケーション技術が求められ (②)、翻訳とは違ってその場限り・一回限りの作業であり (③)、リモート通訳の場合も含めて原発話者と同じ時間と空間を共有しながら行われる必要がある (④)、原発話者の意図を再現するという目的において原発話者を模倣する行為でもある (⑥) からである。6点のうち⑤の何回でも試すことができる活動であることだけが実際の通訳作業とは異なっているが、これも通訳や語学の訓練段階においてはロールプレイなどの例を挙げるまでもなく日常的に行われていることである。

こうした語学教育と演劇の類似性に着目した取り組みとしてよく知られているものの一つに、東京外国語大学における「語劇祭」がある。同大学では学園祭 (外語祭) において、学生がそれぞれの専攻言語で演劇を上演するという伝統があり、そうした演劇を「語劇」

と称している。この語劇はすでに100年以上の伝統と歴史を有しており、同大学の語学教育における一つの象徴的な存在であるとともに、長期間にわたって継承されてきたという点からも、その教育的な効果について肯定的な評価が与えられているものと推測することができる。

同大学のドイツ語専攻教授で、語劇の指導にも関わっていた谷川道子は「ともあれ台詞を覚え、それを同じような同級生の相手との演劇的対話のなかで、見てくれる人＝お客にも通じるようなところにまで稽古を重ねてもっていかなくてはならないのですから、外国語の習得には、これ以上の好機はないのかもしれませんが」と述べている（谷川 2008:22）。

東京外国語大学英米語科で語劇に関わったことがある英語教育者の遠山顕は、語劇の効用について「語劇は結局、人前である種のプレゼンをするわけですから、それは面接や職場での自己表現に役立つはずはないと思います」と述べ、特に外語学習における「話す」という技能についても「自然さを演技することが、外国語習得では大切である、と言いたい」と述べて、演劇的な訓練の有効性を強調している^{注(2)}。

通訳者が自らの主張や表現ではなく他者の主張や表現をその他者に成り代わって行うという事実から、“The Interpreter as Actor”すなわち「俳優としての通訳者」という観点で通訳業務や通訳教育を取り上げる論考も数多く見られる。例えば英国インペリアル・カレッジ・ロンドンのRichard Baleはボローニャ大学通訳翻訳学部で行われた講演において、人前でのパフォーマンスを求められる通訳者を養成する際には「通訳を学ぶ学生が職業に就く前に、このようなプレッシャーのかかる作業環境に対処するスキルを身につけさせることが不可欠^{注(3)}（筆者翻訳）」であると指摘し、通訳者と俳優はともに舞台にふさわしい内容のプレゼンテーションと、即興的に素早く創造的に考える能力が求められるという点である程度の類似点があり、そのためにも演劇や人前でのパフォーマンスを通訳教育のカリキュラムに導入することが有益であると述べている（Bale 2016）。

5-2. 日本語通訳ビジネス科における演劇の教育的効果

以上のような実践報告や提言などを踏まえ、本学科における日本語劇への取り組みにおいては、以下のような教育的効果が期待できる。

5-2-1. 言語スキルの向上

日本語劇に取り組むことで、学生は日本語の発音、語彙、文法を実践的な状況で用いることになる。台本にある台詞を覚え、自らの表現として発表する過程で、日本語の会話表現やフレーズを学び、日本語への理解が一層深まることが期待される。また演劇の訓練には、観客に台詞を正確に伝えることを目的とした、発声練習や滑舌を改善するための練習が含まれている。明瞭で理解しやすい話し方は、聞き手にとっても情報をより明確に理解するための手助けとなる。

本学科の留学生は日本での就職を目指しているが、日本語母語話者によって日本語の音声に対し厳しい評価を受けることが多々ある。これは日本が現在、ほぼ単一の言語で社会

を運営することができるという世界でもまれな「モノリンガル」の国であることにその理由の一端があるのではないかと考えられる。それゆえ、日本語母語話者の多くは言語の異なる人々の存在に十分な想像力が働きにくく、外語母語話者の話す日本語に少しでも不自然な点があると、過剰にその是正を要求するような姿勢も見受けられる。こうした状況が一朝一夕には変わらないという点に鑑みれば、本学科の留学生が日本社会で就職する際には、できる限り自然で流暢な日本語を駆使するに如くはない。この点からも日本語劇を通じた表現力豊かな日本語の獲得は、今後有利に作用するものと期待される。

5-2-2. 手続き記憶としての外語への習熟

言語の習得、特に外語（第二言語）を聞き、話す能力の習得においては、母語とは異なる音素の聴解に始まり、母語とは異なる唇・口腔・舌・声帯などの使い方に習熟し、その外語の運用に求められる語彙や文法といった知識を学ばなければならない。その点で言語能力は一種の身体的技能であるとも言える。言語を自由自在に使いこなすことができるという状態は、技能や習慣などを身体で覚えている状態と同じであり、自転車に乗る方法や楽器を演奏する方法など、自分の身体を繰り返し動かすことで「身体が覚えている状態」にまで習熟するような状態、いわゆる「手続き記憶」として獲得されるべき記憶である。

日本語劇への取り組みにおいては、身体的な演技（自らの表現のみならず、他の演者とのインタラクションにおける表現なども含む）とともに日本語の台詞を繰り返し練習することで覚え、最終的には台本やプロンプター（舞台上の俳優が上演中台詞を失念した場合に補佐する役割）を用いることなく一定時間の発話が可能なレベルにまで習熟させる。これは日本語劇への取り組みの当初、頭で覚えようとする「陳述的記憶」を身体で覚えている状態の「手続き記憶」に変化させる営みとも言える。こうした身体化・肉体化された日本語を運用できるようになることは、留学生の日本語習得においても重要なスキルとなる。

5-2-3. 非言語コミュニケーションスキルの向上

言語においては、身振りや表情などの非言語コミュニケーションも重要な役割を果たす。通訳においても同様に、声のトーンや速度、間の取り方などを用いて、元のメッセージのニュアンスを伝える必要があり、これらのスキルを磨くことで、より効果的にメッセージを伝えることができる。演劇では言葉だけでなく、身振りや顔の表情、声のトーンなどを使って感情やシチュエーションを伝えるため、演劇訓練を体験することで、これらの非言語的表現力を養うことができる。

5-2-4. 文化的理解の深化

日本語劇の台本の内容は、日本の社会や文化を反映している。日本語劇を通じて、学生は日本の文化背景や価値観、慣習を学び、異文化理解が深まることが期待される。加えて、話者の文化・社会的背景によって異なる表現、いわゆる役割語（詳細は6-1. で述べる）の語感もつかむことができると考える。もとより通訳者は異なる文化背景を持つ人間同士

のコミュニケーションを円滑にするという役割を持っているため、日本語劇への参加が自分と他者との間に存在する文化的差異への理解を深めることにも役立つ。

平田オリザは、フランスの社会学者ピエール・ブルデューによって提唱された「文化資本」のうち、身体化された形態の文化資本（礼儀作法、慣習、言葉遣い、センス、美的性向など）を広義での教養＝リベラルアーツと呼んでもいいとした上で、この文化資本について「人種や民族、あるいはジェンダーや性的少数者に対しての偏見がないかどうかも含めて説明している」と述べている（平田 2020:90）。

多数の国や地域から留学生が集まる本学科における日本語劇の訓練と発表は、日本語の言語能力だけでなく、まさにこうした文化資本を身につけるための多面的な学習機会を提供できると考える。

5-2-5. 社会情動的スキル（非認知的スキル）の向上

OECD（経済協力開発機構）は知能テストや学力テストで測ることのできる認知的スキル以外のスキルを「社会情動的スキル（非認知的スキル）」と呼び、それは個人の成功や社会的機能にとって重要な能力および特性の一部であるとして「社会的・情緒的スキルに関する調査」（SSES）を行っている。ここでは、社会情動的スキルが以下のように分類されている（OECD 2021:34）。

- a) オープンマインド（開放性）：好奇心・寛容さ・創造性
- b) 目標の達成（誠実性）：責任感・自制心・忍耐力
- c) 他者との関わり（外向性）：社交性・自己主張・活力
- d) コラボレーション（協働性）：共感・信頼・協力
- e) 感情の調整（安定性）：ストレス耐性・楽観主義・感情のコントロール
- f) その他：達成へのモチベーション・自己効力感（「自分ならできる」という認知状態）

日本語劇の練習や発表は、その過程において他の学生や指導教員との綿密な協力・協働を必要とする。こうした連携は原則として日本語によって行われるため、学生は日本語でのコミュニケーションスキルを向上させるとともに、グループ内での協働や対話の能力、すなわち社会情動的スキルを高めることができるものと考えている。

5-2-6. 発表技術と自信の向上

演劇における舞台上での演技は、公衆の前で話すこと（パブリックスピーキング）への自信と技術を高める。また、劇作家・演出家の蓮行が述べているように、舞台俳優は「二層構造のコミュニケーションを、舞台上で制御して」おり、「舞台上の役者同士の関係と、舞台と客席との関係の双方が意識される」（蓮行 2009:134,135）。つまり、演劇におけるコミュニケーションは舞台上での他の俳優間のみならず、観客とのインタラクションを通じても行われているのである。こうした経験は、将来的にプレゼンテーションや公的な場でのスピーチなど、他の状況においても役立つ。蓮行はまた、演技力とは「受け手に、必要な情報を適切に伝える能力」とであると定義している（蓮行 2009:145）。これはそのまま通訳者に

求められる能力とも重なっている。

平田オリザも「ハーバード大などの MBA 取得コースでは、ドラマ型の授業が必修に近い形で存在します。プレゼンテーションなどでは、とにかく力強い業務遂行能力をアピールしなくてはならないわけですから、ビジネスパーソンにとって、演技力は必須だというのはごく自然な考え方です」と述べている（平田 2009:201）。これは日本や母国あるいは第三国での就職を目指している本学科の学生にとっても必須のスキルであることは言を俟たない。

5-2-7. 場面に応じた言語的創造力と表現力の促進

日本語劇を演じることは、個人の創造力と表現力を刺激する。留学生は自分自身の感情や思考を日本語で表現する方法を学び、日本語が表現される場面やシチュエーションに応じた自己表現のスキルを向上させることができる。岐阜大学留学生センターの橋本慎吾は、「状況と場所と内容」がきちんと書かれた戯曲を会話教育に用いることで、既存の語学教科書の会話文においては必ずしも十分に盛り込まれていないシチュエーションを体感しつつ会話することができるとして、演劇を語学の会話教育を補完する存在として捉えている（橋本 2012:44）。さらに演劇の練習では「身体を意識する」、「反応を意識する」、「シーンで練習する」ということが繰り返し行われる点に着目し、これもまた既存の語学の会話練習を補完するという可能性を示唆している（橋本 2012:48）。

演劇は、ときに突発的な状況に応じた即興的な反応を含むことが多く、これは通訳者が予期せぬ状況や発言に対応する能力を養うのに役立つ。本学科では二年次に同時通訳の実習も行うが、こうした即興能力は特に同時通訳を行う際に重要である。

5-2-8. モチベーションの向上

日本語劇の練習と発表は、他の教科の学習に対するモチベーションを高めることができる。「文化祭」での成功体験や、その成果をクラスメイトや教職員と共有することは、学習者がさらに日本語を学ぶための動機づけになり得る。

6. 日本語劇の実際

6-1. 台本：大人としての留学生にふさわしいものを

語学面では留学生自身が台本に携わるのが理想的ではあるが、時間的制約や学生自身の日本語能力を踏まえ、現時点では台本は教員が用意している。

日本語劇への取り組みの模索は 2015 年度から始まったが、当初は通訳の授業におけるほんのささやかな取り組みに過ぎなかった。上演時間も 10 分程度の短い『寸劇の練習』という名の脚本で、文化祭ではなく通常の授業における特別なイベントとして行った。

2016 年度には現在に至るまで改定を加えながら上演している『世界三大料理』という脚本を作った。これはインターネット上の台本公開サイトにあった戯曲を、作者の許可を得て改変したものである（『2016 年度版・世界三大料理』）。

2017年度は、新たな試みとして『井上ひさし笑劇全集』（1976年、講談社）から数本を選んでオムニバス形式で上演した。ただこれは1960年代から1970年代にかけて活躍した「てんぷくトリオ（三波伸介・戸塚睦夫・伊藤四朗）」のために書き下ろされたコント台本であり、日本語を学んでいる現代の留学生が演じるには難しい部分もあり、この年度だけの取り組みに終わった。

こうした三年間の試行錯誤や指導経験の末に、2018年度からは新たに1年生用と2年生用の台本を用意することにした。また、この年から日本語劇を、本学科の文化祭における正式な活動として位置づけ、対外的にも公開する上演形式とした。以後、2016年度版を補強した①『世界三大料理』のほか、②『ベタ禁止法』、③『通訳機械の反乱』、④『世界三大料理～帝国の逆襲～』の四本を作った。

このうち『世界三大料理』は毎年1年生が取り組む定番の演目とし、2年生はその他の台本を年によって変えながら上演している。1年生が必ず『世界三大料理』に取り組むようにしたことで、自らも上演体験のある2年生が1年生を指導することもできるなど、練習上の効果も期待できるようになっている。

台本のうち①②③はそれぞれインターネット上の台本公開サイトから一部を拝借し、原著者の許諾を得た上で本学科の学生に合わせて改変・脚色を行っている。④はオリジナルの台本として2023年度に創作された。また、いずれの作品も物語の最初と最後に「狂言回し」的な役割としてナレーターが登場し、物語の概要を語るような形になっている。

台本を作るにあたって留意していることは、留学生による日本語劇とはいえ、ストーリーや台詞にできるだけ手加減を加えないという点である。本学科の学生の日本語能力は比較的高く、日本語能力試験N2レベルからN1レベルである。このため日本の民話や童話などの一部を改変した物語劇や、会話の一部を切り取った寸劇といったような形態ではなく、成人の日本語母語話者が演じていても十分に手応えがあるような内容を目指した。

また、様々な文化背景を持ちながら日本で学んでいる留学生が演じる日本語劇であるという特徴、さらには語学をベースに通訳や翻訳などを学んでいる留学生であるという特徴を踏まえ、異文化理解や文化の相違に起因する風刺を積極的に盛り込むことにした。

台詞の日本語については、留学生向けにやさしく理解しやすい表現を特に用いることはせず、現代日本の標準語の口語における一般的で自然な語り口を目指した。さらに流行語や若者言葉、駄洒落などの掛け言葉、さらには若干の方言も含めて台詞を作っている。このような留学生にとっては「容赦のない」日本語で台詞を作ることで、大人が見ても楽しめ、かつ演じる留学生にとっても日本語への興味という知的好奇心を刺激されるような内容を目指した。

平田オリザは従来の日本語教育のテキストについて「自然な日本語ではない」という批判を紹介し、「諸外国においては、演劇は、言語教育（母国語であれ外国語であれ）の、一つの大きなツールとして認められているが、日本でだけはそうになってこなかった。その理由は先に掲げたように、演劇の言葉が『臭く』『暑苦しく』『わざとらしい』ものだという一般的な認識から来ているのだと思う」と述べている（平田2012:87,90）。

こうした指摘も踏まえ、台本における台詞は多少の演劇的な脚色は施しながらもできるだけ自然な日本語の会話文になるように心がけた。その一環として、通訳訓練などでは聞き手の心理的負担を減らすために極力廃するよう指導される冗語、すなわち「まあ」や「えーと」などの言葉も戯曲に盛り込んでいる。冗語に関しては平田オリザも「日本語は比較的、冗長率の高い言語～中略～冗長率が高くなるのは、見ず知らずの他人と話すいわゆる『対話』を始めたときである。対話の中には、言いよどみ、戸惑い、ほかし、謙遜など、意味と関係ないが、人間のコミュニケーションには深く関わる要素が、日常の『会話』より多く入らざるを得ない^{注(4)}」と述べている（平田 2015:132）。

また台本にはいわゆる「役割語」に分類される言葉遣いが多用されている。こうした言葉遣いの先駆的研究者である金水敏は役割語について「ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを『役割語』と呼ぶ」と定義している（金水 2003:205）。

金水が指摘するように、こうした役割語は必ずしも現実の人間のリアルな話し方を反映しているわけではなく、またときに偏見や差別とも結びつきやすい「ステレオタイプ」に墮する危険性もある。その一方で金水（2004）は「台詞を役割語によって構成すれば、フィクションの作り手の想定した人物像が瞬時に、的確に受け手に伝わる」と指摘しており、これは演劇の戯曲における台詞を作るにも有効に作用する。

こうした役割語は実際の台本作りにおいても、和食を擬人化した武士、フランス料理を擬人化した貴族的な女性、インド料理を擬人化した関西人といったキャラクター造形に利用している。その上で学生には役割語のある種のフィクション性についても説明を行い、偏見や差別とは明確に異なる捉え方をしよう注意を促している。

また、一つの作品の上演時間を30分弱に設定し、起承転結のドラマをもつある程度ボリュームのある内容にすることで、上演後の達成感や満足感を持てるような内容にしている。

6-2. 上演に至るまでの過程

上述したように日本語劇は文化学園の4校（文化服装学院・文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化外国語専門学校）が合同で行う「文化祭」における上演を前提にしている。文化祭は毎年11月3日の「文化の日」を中心とした3日間で開催されており、日本語劇はそのうちの2日間を使って上演している。

具体的には1年生と2年生がそれぞれ違う演目を行い、いずれも25分程度の上演時間となっている。2日間で述べ6回ほどの公演を行っている。

練習は7月末から入るが、夏休み明けの9月上旬から約2か月の期間を使って行う。2023年度の場合、通訳科目の授業を中心に、必要に応じて臨時的に設けた練習時間および本番前の2日間のリハーサルを含め1年生は総時間数25時間、2年生は33時間練習時間を設けた。

6-2-1. 台本の読み合わせ

まず7月中旬に台本を配布し、一度全体で読み合わせを行う。この段階ではまだ配役は決めず、いくつかのグループに分かれて台本の台詞を一人ずつ順番に読んでいき、読めない漢字や知らない単語などをチェックしていく。同時に重要な演出上のプラン（登場・退場など）も伝えて、台本全体の大まかなイメージをつかめるようにしている。

6-2-2. キャスティング

一つの作品に登場する人物はおおよそ10名程度であり、1学年の学生数は20名から30名ほどであるため、ダブルキャストやトリプルキャストで配役を決めている。文化祭での上演は一日に何度も繰り返して行われるので、一つのキャストにつき一人の配役では負担が重すぎること、同じ配役の学生同士でアドバイスを行えることなどが複数配役の理由である。

また、役柄によって台詞の量が異なるため、積極的な学生は台詞の多い中心的な役柄を希望するのに対して、非積極的な学生や人前で演じることに恥ずかしさや恐怖心をもっている学生はできるだけ台詞の少ない役柄を希望する、あるいは音響や照明といった「裏方」的役割だけを希望する者もいる。しかし、日本語劇は上級日本語の涵養と通訳におけるデリバリースキルの向上という本学科のカリキュラムに位置づけられた課題であり、かつ入学時の面接でもこうした課題に取り組むことは必須である旨を伝えているため、基本的には全員何らかの役を担当するように指導している。

こうした配役は基本的には学生の意思に任せるが、非積極的な学生が多い場合や、特定の役に希望が偏った場合、本人の特性などに鑑みて教師が介入・調整することもある。

6-2-3. 日本語指導

上述のように、台本は「容赦のない大人の日本語」で構成されているため、留学生にとっては理解のハードルが高いものである。そのため稽古に入ってからでも随時台詞の内容について説明を加える。例えばアクセントやイントネーション、語彙の意味、役割語が暗示している人物の性格や類型、演出上必要と考えられる語速や間のとり方などである。演劇において不可欠な登場人物間の関係性にも留意しながら、「誰が、誰に、どのような意図でこの台詞を言っているのか」、「その台詞を言われた側はどのような感覚を持つのか」についても学生に考えさせ、教師からもアドバイスを行っている。

さらに教師が感情を込めて台本を読んだ音声を配布し、音声表現上のヒントも与えるようにしている。

また、「発音音声」という日本語発音トレーニングや音声聞き取り強化の授業では、文化祭準備が本格的に始まる10月から台本を音声化したものを教材とし、シャドーイングやシンクロリーディング練習を取り入れている。加えて、学生に文化祭後に台本の一部のシャドーイングテストを行うことを伝え、台詞を覚えることや発音練習へのモチベーションを高めるようにしている。

台詞を覚えて台本を持たずに演技の練習ができるようになる「立ち稽古」の段階に入ると、「発音音声」の担当教師が日本語劇の練習に立ち合い、台詞で聞き取りにくい部分やアクセントが間違っているところをアクセントマークなどを使用して指摘し、観客に伝わる台詞を言えるよう発音面の指導を行っている。

6-2-4. 演技指導

「立ち稽古」において学生が台詞を忘れた場合には、演技をいったん止め、いわゆる「ストップモーション」の状態のままのように指導する。その際、その台詞を発すべき役を担当しているダブルキャストやトリプルキャストの他の学生が「プロンプター」として台本の台詞を伝えるようにする。同じキャストの学生同士がプロンプターになることで相互の協力を図り、さらには自らの台詞を覚える一助にもなると考えてこのような方法を取っている。

現在までのところ、台本はコメディ（喜劇）であるため、怒りや悲しみといった比較的強い感情を伴う台詞はほとんどないが、それでも台詞に真実味をもたせるためにできるだけ感情を込めて台詞を発するよう指導する。学生によっては恥ずかしさやこうした演技に不慣れなことから、なかなか感情を込めて明瞭かつ大きな声で台詞を言うことができない者もいるが、指導する教師が率先して演技をして見せることで、できるだけそうした羞恥心や恐怖心を取り除くように留意している。

6-2-5. 上演

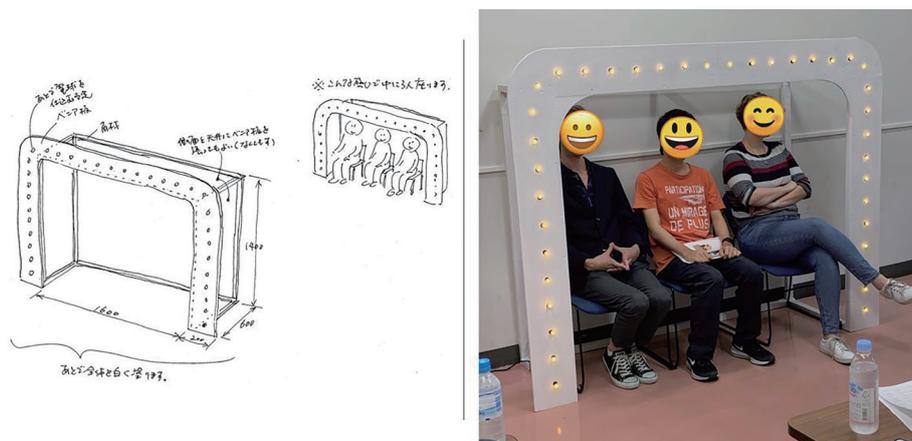
会場は本学科の教室を利用している。自立式・組み立て式のパーテーションを用いて舞台を設営している。

演劇においては舞台を暗転させたり、舞台にだけ照明を当てたりする必要がある。スポットライトとフットライトを使用し、簡易な装置ではあるが適宜照明を当てる部分を変え効果を引き出している。音響もまた「演技」の一助となるため、台本と関連した「意味のある」音響効果を加えることが重要になる。例えば和食の登場では料理番組のオープニングテーマを、アメリカ料理の登場ではアメリカ合衆国国歌『The Star-Spangled Banner』という具合である。

衣装については学校の文化祭予算から一部を使って演目に合うものを購入することもあるが、多くは学生が自らの発案で手持ちの服などを工夫して利用している。また一部の民族衣装についても学生が手持ちのものを提供しているほか、教師からも私物を貸与している。

予算上の都合から大道具と呼ばれる舞台装置はほとんど使わず、教室の机や椅子などを活用しているが、2019年度に『通訳機械の反乱』を上演した際には、本学園施設部の協力を得て通訳機械を表現するための大道具を制作した（図2）。

図2



日本語劇をより多くの観客に見てもらうため、宣伝活動も必要である。このためポスターを制作している。ポスターのデザインや図案は学生の有志が担当している。このほか校舎の中央広場に面したバルコニーに日本語劇が上演中である旨を知らせる横断幕を掲げる（学生と教師が協力して手作りで制作：図3）ほか、上演直前にはいわゆる「呼び込み」の活動も行っている。

図3



7. 成果

日本語劇への取り組みが留学生にどのような成果をもたらしているのかについては、在校生及び卒業生へのアンケート調査と、観客へのアンケート調査を紹介したい。アンケートでは以下の項目で調査を行った。

- ア. 日本語劇を体験したことで、自分自身に何か変化がありましたか。小さいことでもいいです。（言語面、物事に対する態度や姿勢など）
- イ. その他、日本語劇をしてみて、今感じていることを自由に書いてください。

なお、卒業生に関しては以下の項目を加えて聞いた。

- ウ. 卒業後に仕事をする上で、日本語劇の効果を感じる時がありますか。小さいことでもいいです。

7-1. 演劇の教育的効果

この項では5-2. で述べた日本語劇の取り組みで期待する教育的効果のそれぞれの項目に当てはまるアンケートの回答をいくつか抜粋して学生の記述通り記す。

7-1-1. 言語スキルの向上

日本語劇に取り組むことで、学生は発音、イントネーションだけではなく、さらに自然な表現に意識を向けるようになったようだ。

- ・表現力が増えたのが一番大きかった。自分の台詞を覚えたり、他の人の台詞を聞くことで、色んな表現が覚えるようになり、自然に使えるようになった。あと、発音を練習するためにも役に立った。
- ・日常会話とは違って、劇の台詞を話すチャンスは観客にとって一回しかないので、できる限りきれいな発音をしなければなりません。その後も自分のイントネーションと発音に注意しながら続けています。

7-1-2. 手続き記憶としての外語への習熟

身体的な演技とともに台詞を繰り返し覚えることで、上演が終わった後しばらく時間が経っても台詞や表現がスラスラ言えたと複数の学生が回答した。

- ・暗記した日本語はどのような場面で使うものかはとてもわかりやすかったです。そのために、学んだ日本語は半年後、一年後もなかなか忘れないものです。それは自分だけではなく、クラスメイト達と食事をする時も「これ以上事態をややこしくしないでほしいんだけどな。」「あんたどっちの味方でんねん!」「一度食べたら癖になる!」というネタが止まらないでした。
- ・日本語劇で学んだ言葉や表現は、やはりなんとも練習を重ね、同じ台詞を繰り返し、アウトプットことで、まるで脳内に刻み込まれたようです。

実際、日本語劇の取り組みが終了してからも、教室ではその場面にふさわしい言葉が台本の台詞の引用として用いられ、クラス全体が笑いで包まれるという光景がたびたびある。これは、あるシチュエーションに対して自動的に発話が行われるという「手続き記憶」の再生と捉えることができる。学生の中には、上記の回答のように卒業後も長期にわたってこうした台詞が口をついて出てくるといった感想を述べている者も多く、日本語劇への取り組みがある程度まで肉体化された日本語の獲得に資するものであると言えるのではないだろうか。

7-1-3. 非言語コミュニケーションスキルの向上

日本語劇を通じて、言葉だけではなく非言語的表現にも気を使っていたことがわかる。

・実際に演劇をして初めて、プレゼンの時と完全に違うなと気づきました。身振り手振りはプレゼンの時より多く使うのはもちろん、観客を楽しませるために、表情、声、視線、タイミングを全てしっかりとしなければならないことを学びました。あの時までは自分が劇を見る人だけでしたが、劇をする側になると、そう簡単ではないと知りました。演劇を通して、教科書にない日本語が学べてとても面白かったと思います。

7-1-4. 文化的理解の深化

学生は自分の役になりきることで、日本語の特徴、とくに役割語などの言葉遣いにも理解を深めることができたようだ。

・日本語は老若男女に分けて使い方も違う外国語です。いつもドラマや教科書で必死に勉強してました。～中略～日本語劇のおかげでその後、どんな相手にも日本語がスラスラ言えるようになりました。

・役割語（～わ、おめえ、わし～、など）の分け方やニュアンスが少しわかってきて、友達と遊ぶ時にひたすら使えるようになりました。～中略～仕事をする上で、部署の上司・先輩の話し方及び、表現や言葉遣いなどを真似する癖を身につけました。演劇の役のように職場での話し方と日常的な話し方ははっきり分けるようになりました。

7-1-5. 社会情動的スキル（非認知的スキル）の向上

共通の目標に向かって協働することでクラスメイト間の結束力が高まったという回答はアンケート調査結果の中で最も多く見られた。

・最初大体の人は羞恥心などで、嫌う傾向があると思います。しかし、一旦全員がそれを捨てて同じ目標をやり遂げたいという決心ができれば、どんどんその魅力を感じられて好きになっていくのではないかと思います。この話は、後輩たちとも話したことがあり、そう思った人は多かった印象です。日本語劇を通して仲間たちとの絆が築けて、そして高めたクラスの結束力がまた学習意欲につながり、楽しい学校生活になったと思います。

・チームワーク（*普段の授業でのグループワークを指すと思われる）のときより上手くチームをリードできるようになった。仲間に対してもっと思いやりを持つようになり、コミュニケーションも上手く取れるようになった。

7-1-6. 発表技術と自信の向上

普段の授業とは違って日本人の割合が高い大勢の観客の前で上演した体験は、学生の自信にもつながったことが回答からうかがえる。

- ・感情を込めて話せるようになりました。人前で日本語のプレゼンや通訳をすることが少し楽になりました。
- ・感情豊かに話すことで、聞き手にメッセージがより伝わりやすくなり、緊張してもいい発表できるようになりました。また、話し方や自然な間の取り方がうまくなり、聞き手に良い印象を与えられるようになったと感じます。
- ・就活の面接官の前で自信を持って話すことができるようになりました。

7-1-7. 場面に応じた言語的創造力と表現力の促進

日本語劇のシチュエーションに合った表現を繰り返し練習したことで、日常生活においても効果的にメッセージを伝えるスキルを身につけたようだ。

- ・場面に合わせて声の高さや感情の込み方がコントロールできるようになりました。日常生活では感情的になっても母語に変更せずに日本語で発言のコントロールができるようになりました。
- ・日本語劇を体験して、普段日本語を話す時相手にちゃんと伝わるように声のトーンと発音を気にして相手にわかりやすいように話しました。

7-1-8.モチベーションの向上

日本語劇を体験し、普段の日本語使用に対する振り返りや気づきがあり、自分に必要な日本語能力を改めて向上させようというモチベーションに繋がったことがわかる。

- ・自分が今回の演劇を通して主に改善したいところは二つあります。一つ目は滑舌が悪いということです。二つ目は語彙力の不足です。～中略～自分はスピードアップすると必ず発音が上手くできなくなります。それはやはりネイティブスピーカーと外国人の違いがはっきりしていると思います。なるべくネイティブに近い日本語を身に付けるために、滑舌の練習もこれから注意しないといけないと反省しました。
- ・台本を初めて確認する時に、普段日本人が普通に使っている言葉なのに初めて見た言葉もありましたので、やはり自分の語彙力はまだまだレベル低いと思いました。これからは毎日語彙を増やすように頑張ります。

7-2. 想定外の教育的効果

日本語劇の効果として想定していなかったことを以下に述べる。

7-2-1. 成功体験としての思い出

卒業生にとって、日本劇は他校の留学生がほとんど経験していない「特別な体験」として思い出に残っているようだ。学生の人生において忘れられない「いい思い出」になったことは教師にとっても感慨深いものである。

・学生時代に母国語ではない日本語で演技するチャンスがあって、本当に楽しかったです。同時に、演出を準備する間にクラスメイトたちと服装や演技の練習、交流することができて、素晴らしい思い出になりました。その個人的な経験を除いても、日本に留学している間に人と会話するチャンスはたくさんありましたが、グループの前でスピーチや発表をする機会は比較的少ないと思います。私と同じく日本に留学したことがある友人たちも、ほとんどこうした経験がないと聞きました。

・日本での学生生活の中で、日本語劇が一番楽しかったイベントだと思います。本番までのプロセスはものすごく大変だったのですが、就活していた時にいつも BIL でやった日本語劇を自慢していました。専門学校にいたときに比べて、今はそれほど日本語を話していないですが、でも日本語劇のおかげで人前で恥ずかしがることなく自由にありのままにいられるようになりました。日本語劇はいつまでも一生忘れないです。

実際、文化祭の日本語劇上演に合わせて学校を訪れる卒業生が多い。卒業生たちは現役生たちの演技を見ながら過去に自分が演じた劇の内容や役を思い出し、口々に今でも鮮明に台詞を言えると教員に伝えてくる。代が違っても卒業生同士が日本語劇を共通の話題として話し交流する様子が見られ、日本語劇上演がある種の同窓会のような存在にもなっている。

7-2-2. 仕事上で「演じる」こと

今回、卒業生には仕事をする上で、日本語劇の効果を感じる時があるかをアンケートの質問項目として加えた。実際に通訳者として活動している学生からは以下のようなコメントを得られた。

・今年の4月に台湾の役者さんの日本でのファンミーティングと雑誌・テレビ取材の通訳を担当した際、もう一人プロの通訳者がいました。舞台上で役者さんはイヤホンを通して私が訳した内容を聞きながら笑っていました。役者さんから「プロの通訳者はもちろんすごいです、〇〇さんの通訳はもっと感情がこもっていて、私たちが伝えたいことがより伝わりますし、面白くてテンションが上がります」と言われました。それも日本語劇のおかげだと思います。

・今の仕事は劇を演じているように、辛くても気持ちを隠して笑顔を見せるようにお客様を接する時や、超難しい質問がきたら、～中略～まるで台詞を忘れて、でも慌てなくて続いてしかない（*台詞を忘れても慌てずに対応し続けるという意味だと思われる）すなわち、臨機応変に対応できる力がよくなっているのを感じる時は一番日本語劇の効果を感じる時です。

通訳以外の仕事でも、4. や5-2-4. でも述べたように日本劇で自分とは違う役柄を演じて異文化、他者への接触を疑似体験した経験が活かされたとのコメントがあった。日本企業が海外（学生の母国）に進出する際のコンサルティング業務を行っている卒業生がそのシチュエーションに合った立場になりきって仕事をしていると語っている。

・仕事でお客様との打ち合わせの際に、お客様のニーズやインドでどんなサポートを求めているのか、そしてインドチームとのコミュニケーションでお客様の立場になって交渉します。その時、日本語劇を思い出し、お客様の前で会社員、そしてインドチームとの打ち合わせでお客様になって、演じをするようしています。

日本語教師を目指している、また母国に帰って日本語教師をしている卒業生からは、教師として必要とされるスキルが日本語劇によって磨かれたという実感があったようだ。

・教育実習で実際に教壇に立って日本語を初級の外国人生徒に教える時の表現力は明らかに昔とは違い、自信にあふれたものです。普段は静かな方というのかもしれませんが、教壇実習を見た日本語学科長も、スイッチが入って、人が変わったように見えてびっくりしたと褒めてくださいました。

・日本語教師の仕事はほぼ毎日劇をしているような感じです。面白い授業をするには、教師が劇の「役者」になることが欠かせないです。個別指導はいいですが、多くの学生が集まっているクラスで教えるときに、劇をしている時のようにしなければ、学生がなかなか興味を持ってくれません。教師の仕事は知識だけでは足りない気が付きました。日本語劇は教師になるための必要な技術を教えてくれるものだと思います。

通訳以外の仕事でも日本語劇で身につけた「演じる」ことの経験が実際の業務を円滑に進める一助となることが今回のアンケートからわかった。

7-3. 観客の反応

観客からの回答のほとんどが留学生の努力や能力を賞賛するものであった。

・普段使わないような難しい言葉もたくさん出てきたのに、皆さんすらすら台詞が出てきていて、さすがだなと思いました。
 ・所々に日本語の難しい表現、アニメのネタや、日本語の言葉遊びがあったのが聞いていて面白かった。日本語を母語にしている日本人が見てもとても満足出来ました！

改善すべき点として挙げられたのは、全て発音や発声面でのコメントであった。

・台詞も流暢だった。強いて言えばカタカナ語と漢字などの台詞自体が難しいので高低アクセントと区切りをもっとはっきりしたらもっと聞きやすかったのではないかと思います！また一番最後の列に座ったら声が届かなかったりするので声がもう少し大きかったら完璧ですね！
 ・時々発音のせいで何を言っているかよくわかりませんでした…それはしょうがないと思いますけど…でもみんながすごく頑張りました。

7-4. 非常勤講師からのコメント

本学科の非常勤講師からも日本語劇を上演する前と後の学生の変容をどう感じているかについて聞き取りを行った。教育的効果に関わるコメントを以下に示す。

- ・日本語劇の後は劇で出てきたフレーズを面白がって使っている。授業内でもパフォーマンスが明るく盛り上がるようになった。
- ・声が大きくなった。声を出すのに慣れた感じがする。新しい表現を学んで、言うようになった、楽しそうに。普通の授業ではこんなふうにはならない。日本人らしい表現が身についた。
- ・実際に通訳するときは演出（*演じること）が必要で、プロの間でも大切だと言われているし、それを考えてやって（*通訳して）いる。こういったことは普通の授業では教えるのが大変だが、日本語劇を経験することによって何十倍のことが達成できる。

8. 今後の課題

十年近くにわたる日本語劇への取り組みを通して、いくつかの問題点や反省点が浮かび上がってきた。ここではそれらを整理してみたい。

8-1. 日本語理解の困難

もとより「容赦のない日本語」、「日本語母語話者が鑑賞しても十分に楽しめる大人の内容」を目指して脚本を作ってきたが、一部の留学生にとっては台本理解のハードルが高いという印象を持っている。もちろん導入段階として台本の読み合わせや語句の説明、背景知識の紹介などを行っているが、それでも日本語母語話者であれば容易に理解できる言葉のニュアンスや行間に込められた意味などをつかむことが難しい学生もいるようである。学生自身からも以下のような回答が見られた。

- ・劇の練習を始める前に、先生が役についてもっと詳しく説明してくれたらよかったです。たとえば、映画の脚本に近い脚本を書くと、台詞のトーンや誰に向けたものなのかなどがわかります。

特に台詞には、登場人物のキャラクター設定を容易にするため、前述したような役割語が多用されている。日本語母語話者にとってはそうした役割語の存在が役どころの理解において大いに助けになるが、こうした特徴を持たない言語を母語とする一部の留学生にとっては、必ずしも理解することが容易ではない。台本の読み合わせや立ち稽古の際には、必要に応じてそうした言葉の意味や意図を説明しながら指導する必要がある。

8-2. 演技そのものの困難

学生の中には、演劇という形で人前におけるパフォーマンスをすること自体に苦手意識や忌避感を抱いている者もいる。入学試験における面接では、カリキュラムに人前で話す

訓練が多く含まれることを説明し、日本語劇についても参加が必須である旨を伝え、同意を得ている。しかしながら、入学し、日本語劇への取り組みが始まる段階になると、演じることに抵抗を示す学生が毎年若干名存在する。

また日本語劇に参加することは承服するものの、どうしても大きな声を出すことができない、演技をすることが恥ずかしいという学生はいる。そうした学生の中には、台詞や出番の少ない役に希望者が集中するということもある。また俳優としてではなく、音響効果や照明その他の「裏方」的役割として参加することは可能かと打診してくる学生もいる。学生からも人前で演技することへの苦手意識を示すコメントが見られた。

- ・演劇に対する学生たちの意見はバラバラで、楽しくやる人もいれば全然ダメな人もいます。
- ・緊張のせいで、体がガチガチになり、本番の時はうまく表現できなかったと思います。そして、緊張で台詞を速く言ったり、声が小さくなったりしました。

そうした学生には改めて日本語劇への取り組みの意義について説明し、自らが目指す将来の目標においてどのような利点があるのかを挙げながら丁寧に説得を行っているが、それでも最後まで積極的な態度を見せない学生はいる。最終的には「参加することに意義がある」として、演劇的にはかなり不自然な状態になることを甘受した上で参加を促している。

ただし、当初は非積極的な態度を見せていた学生も、周囲の積極的な学生に感化されて、最終的には当初予想もしなかったような自然な演技や表現に到達することもある。仲間との協働を通して、最初は非積極的であった学生が不特定多数の観客の前で、母語ではない日本語で役を演じることができたという成功体験を得ることは、当該学生にとっても新たな学びを得た上での達成となり、本人の自信にもつながるものと考えている。

実際、初めは戸惑いや恥ずかしさを示しながらも練習を重ねるうち苦手意識を克服していった様子が学生のアンケートからも見られた。

- ・最初、どうして日本語演劇がカリキュラムに入っているかと思いましたが、実際に何回のリハーサルをした後、よく分かりました。それは、ただの演劇ではなく、日本語力に対して、話すことや語彙を覚えるスピードや自分の感情を込めて日本語をペラペラ喋ることなど、ある程度上手になったと思います。
- ・最初に日本語劇の練習が始まった時、自分はとても恥ずかしいと思いました。特に「それがこの俺、イタリア料理さっ」を話したとき、声が小さくて、動きも不自然でした。実は、その時私はもうちょっと嫌になりました。しかし、日本語劇を通じていろいろな能力を高めることができるということは自分でもよくわかっていました。ですから、私は「困難を乗り越え、自分が絶対できる」と考えて、みんなと一緒に真面目に練習していました。2、3回やってから、上手になりました。今回の日本語劇は、今後の仕事だけでなく、自分の人生にとってもすごくいい経験だと思います。

学生が自ら学び、演劇を作り上げていくためには、それが自分の目標と合致していると

いう自覚と課題への信頼がなければならない。教師としてはそうした自覚を促し、課題への信頼を獲得できるよう日本語劇への取り組み方法を考え、かつ学生自身の変化を信じて粘り強く指導を続けていきたい。

9. 改善案と今後の展望

日本語劇への取り組みは、現時点では今後も日本語通訳ビジネス科のカリキュラムの一環として継続していく予定である。今後継続していく上での展望を記しておきたい。

9-1. 留学生による戯曲制作

現時点では戯曲（台本）はすべて教師が作っているが、将来的には学生自身が作るということも考えられる。ただし、日本語通訳ビジネス科の留学生は日本語母語話者ではないので、一定レベルの戯曲を執筆することにはかなり高いハードルが存在するものと思われる。もし学生同士の協働による戯曲を作るのであれば、別途そうした作劇を目的とした授業をカリキュラムに組み込む必要があるものとする。

9-2. 台本理解の強化

これまでは夏休みの直前に台本を配布し、大まかに読み合わせを行ったあと配役を決め、夏休み後から練習や稽古に入っていた。台本を十分理解しないまま練習を行い、本番を迎えた学生がいたことを踏まえ、2024年度からは、夏休み前に課題を与えることにした。まず、十分台本を読み込んだ上で、ワークシートで自分がやりたい配役の分析を行い、そのキャラクターの台詞を録音し提出させた。

こうした取り組みの効果については今後の実践において検証していく予定だが、より丁寧に台本を読み、台本全体の理解を深めてから配役を決めることで、その後の練習や稽古がより効率的に進むであろうことが期待される。

9-3. 文化学園内の他校との協働

文化学園では、文化服装学院、文化学園大学、文化ファッション大学院大学においてそれぞれファッションショーを主体とした演劇的取り組みが毎年行われており、舞台演出や舞台装置等の技術やノウハウの蓄積も相当なものがある。例えば衣装の制作や上演時の音響・照明、さらには台本制作などにおいても、文化学園の各学校とコラボレーションできる部分は多いのではないだろうか。

日本語通訳ビジネス科の日本語劇への取り組みはそうした技術やノウハウとの親和性がきわめて高いものと認識しており、将来的には学校横断的な協働によって取り組みが行われるよう働きかけていきたい。

注

- (1) 本書では「総合的な」という意味で使われている。
- (2) この発言は、谷川道子、柳原孝敦編著『劇場を世界に 外国語劇の歴史と挑戦』に講演録という形で収録されている (p.203,210)。
- (3) Aspects of performance will necessarily become a crucial part of an interpreter's education, and it is therefore vital that future interpreting pedagogy strives to equip student interpreters with the skills to deal with such a pressured working environment before they enter the profession. (Bale, Richard 2016 'Online to On Stage: Towards a performative approach to interpreter education')
- (4) 平田オリザは会話と対話をそれぞれ以下のように定義している。「会話」= 価値観や生活習慣なども近い親しい者同士のおしゃべり。「対話」= あまり親しくない人同士の価値観や情報の交換。あるいは親しい人同士でも、価値観が異なるときに起こるその摺りあわせなど。(平田 2012:95)

参考文献／参考 URL

- OECD (2021) 《Beyond Academic Learning FIRST RESULTS FROM THE SURVEY OF SOCIAL AND EMOTIONAL SKILLS》<https://www.oecd-ilibrary.org/deliver/92a11084-en.pdf?itemId=/content/publication/92a11084-en&mimeType=pdf> (参照 2024.10.16)
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の研究』 岩波書店
- 金水敏 (2014) 『〈役割語〉小辞典』 研究社
- 谷川道子、柳原孝敦 (2008) 『劇場を世界に 外国語劇の歴史と挑戦』 新宿書房
- ダニツァ・セレスコヴィッチ (2009) ベルジュロ伊藤宏美 訳『会議通訳者 国際会議における通訳』 研究社
- 野呂博子 (2015) 『演劇が日本語教育をもっとイキイキさせる！』 AJALT # 38 <https://one-taste.org/kobanashi/wp-content/themes/kobanashi/img/documents/AJALTNo38-2015.pdf> (参照 2024.10.16)
- 野呂博子、平田オリザ、川口義一、橋本慎吾 (2012) 『ドラマチック日本語コミュニケーション「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』 ココ出版
- 平田オリザ、蓮行 (2009) 『コミュニケーション能力を引き出す』 PHP 研究所
- 平田オリザ (2012) 『わかりあえないことから——コミュニケーション能力とは何か』 講談社
- 平田オリザ (2015) 『対話のレッスン 日本人のためのコミュニケーション術』 講談社
- 平田オリザ (2020) 『22 世紀を見る君たちへ』 講談社
- Bale, Richard (2016) 'Online to On Stage: Towards a performative approach to interpreter education' SCENARIO Journal Volume X, Issue 2 (2016) University College Cork <https://journals.ucc.ie/index.php/scenario/article/view/scenario-10-2-2/html-en> (参照 2024.10.16)
- ローデリック・ジョーンズ (2006) ウィンター良子、松縄順子 訳『会議通訳 Conference Interpreting Explained』 松柏社